

# しろあとだより

第24号

2022年3月

高槻市立  
しろあと歴史館

## 目次

「新出の松永久秀肖像画について」千田康治……………1

「帯仕山の城郭遺構について」中西裕樹……………7

## 新出の松永久秀肖像画について

千田 康治

はじめに

当館は戦国武将・松永久秀の肖像画を所蔵している(図1)。この肖像画は、高槻ゆかりの人物の資料として、当館が平成三十一年に古美術商から

購入した。収蔵後の調査により、これまで知られていなかった久秀の実像に近い容貌を描いたものである可能性が高いことがわかった(1)。久秀は、戦国武将・三好長慶に仕えて頭角を現し、長慶の本拠、芥川城(本市大字原の芥川山城跡)において、訴訟の取次など要職を担った。武将としても活躍し、後に大和国(奈良県)一國を支配する畿内有数の実力者となった。天正五年(二五七七)、仕えていた織田信長を裏切ったことにより攻められ、信貴山城(奈良県平群町)で自害した。

久秀の出自については複数の説があるが、近年では摂津国東五百住(現



図1 松永久秀像(当館蔵)。修復後の現況



図5 端裏の墨書  
(修復前)



(下)図4 仕服 (上)図3 柄の桐紋目貫



図2 顔面部の拡大

在の本市東五百住町)の出身する説が有力視されている(2)。本稿では、この肖像画を紹介する。

### 一、肖像画の詳細

法量は、本紙部分が縦一〇八・七cm、横四三・六cmで、紙本著色である。

図様は、縹色地に白抜きで桐と推定される植物の文様を表した大紋を着用し、侍烏帽子を被り、緑色の上畳に座した姿で描かれている。烏帽子の被り方は、掛緒で冠をおさえ、顎で結ぶ頂頭掛で、掛緒が見えているのが特徴である(3)。

容貌は、眼光鋭く、頬骨が張り、唇は厚く、前歯が出た特徴的な顔立ちである(図2)。年の頃は四十〜五十代に見える。また、中世の武家肖像画では髭があるのが一般的だが、この肖像画は無髭である。

足には白足袋を履き、右手にはスキの文様の扇を持つ。左腰には、柄に桐紋の目貫を据えた黒漆研出鮫鞘の腰刀を指す(図3)。久秀が座す上畳は、小紋の高麗縁である。向かって右側の傍らには、金蘭で桐の文様を表した仕服が置かれている。この仕服は、桐の描写が腰刀の柄の桐紋や大紋の文様と比較すると、細かいところまで表されており、金の彩色の下地に朱を引いている点も含めて、入念に描かれている(図4)。

上部の余白には、「天正五丁丑年冬十月十日薨 妙久寺殿祐雪大居士尊儀」と松永久秀の命日と戒名が記されている。これに加えて、詳細は後述する、目貫に桐紋をあしらっていることや、名物茶器を取めたとみられる仕服の存在などから、この肖像画の像主が久秀であることが特定できる。表装の端裏には「松永久秀公画像」と墨書があり、これは後世の加筆とみられる(図5)。伝来については不明であり、墨書を伴う木箱や、書状等の附属する資料はない。

### 二、修復の実施

この肖像画が当館に収蔵された当初の状態は、本紙部分の各所に強い折れ皺があった(図6)。顔面にかかる深い折れ皺もあり、中でも、銅を含んだ顔料の緑青によって緑色に着色されている上畳部分では、緑青の浸食による劣化がひどく、折れ皺の頂部に大きな亀裂が生じ、それが表具背面に達していた(図7)。また、表具も全体的に傷んでいた。そこで、紙史料の



図8 修復作業中の背面。古い裏打ち紙をはがした状態



図7 修復前の折れ皺の様子(上下共)



図6 修復前の状態

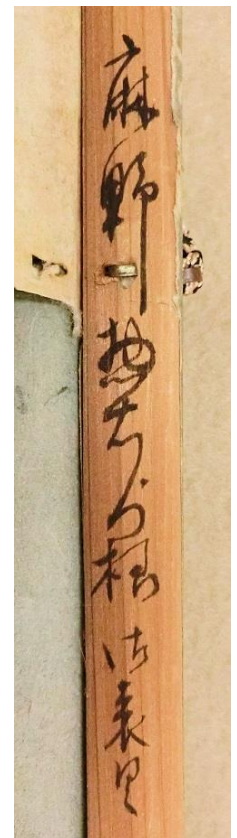


図9 表木の墨書

文化財の修復を専門とする工房レストア(大阪市)にて、令和二年十二月から令和三年三月にかけて修復を実施した。  
この修復において、古い裏打ち紙を除去して張り直し、折れ皺を伸ばし、その部分に裏打ちをして補強した。また、表具の取り換えを実施した。  
金襴の仕服について、表現が他の部分と異なることから、後世に加筆された可能性を考えていた。しかし、古い裏打ち紙を除去した際に確認したところ、制作当初から描かれていたことがわかった(図8)。また、表具を解体したところ、表木(表具上端の木。八双とも)に「麻野惣右衛門様御表具」と墨書があることが確認できた(図9)。表具師が発注者の名を書き留めたものとみられる。緑青による浸食が表具にまで達していたことから、表具は肖像画の制作当初からのものと判断した。そのため、麻野惣右衛門がこの肖像画の制作に関与した人物である可能性は高い。同人については不詳だが、今後、伝来を調べる際の貴重な手がかりである。

### 三、考察

#### (一) 制作年代について

直垂の一種である大紋を着て烏帽子を被り、右手に扇を持ち、左腰に腰刀を指した姿で上畳に座すという、十六世紀の武家肖像画の典型的な描き方である。同じような肖像画としては、久秀が仕えた三好長慶の永禄九年(二五六六)の賛を有する聚光院藏品(京都市)や元亀二年(二五七二)の賛がある南宗寺藏品(堺市)、原画が永禄六年(二五六三)の年紀を有する三好義興像模本(京都市総合博物館蔵・図11)があげられる。

しかし、この肖像画の描写を検討すると、顔や衣服を描いた線が固いことや、左右の肩のバランスが悪いことなど、技量的に劣る箇所があることから、十六世紀に描かれた原画を後世に写した模本と判断した。

当館が調査の際に意見を求めた東北大学の杉本欣久准教授(日本近世絵



図10 三好長慶像模本(部分)  
原画は、元亀2年(1571)の  
賛がある南宗寺(堺市)の所  
蔵品。  
(所蔵・画像提供)  
京都大学総合博物館



図11 三好義興像模本(部分)  
原画は、知恩寺(京都市)塔  
頭・養源院の伝来品と推定  
される。  
(所蔵・画像提供)  
京都大学総合博物館

画史)は、模本であるとの当館の見解に同意され、さらに作者について、顔の彩色や輪郭線などが手慣れているとは言えないことから、著名な画家によるものではなさそうだが、仕服の金の彩色では事前に朱を引いたうえで塗っていることなど、絵画の基本的な技法を知っていることは確かなようだと指摘された。そして制作(模写)の時期について、江戸時代中期になると、各地に残る古い肖像画を後世に残すための調査や報告が盛んになったことや、紙の劣化の程度などから、十八世紀後半頃ではないかとの見解を示された。

## (二) 容貌の描写について

この肖像画での久秀の容貌は、目を大きく見開き、頬骨がはっている。

唇は厚く、前歯が出た個性的な顔立ちで描かれており、「威厳」や「徳」、「端正」といった、美化された顔立ちの表現からは程遠い(4)。

武家肖像画は、生前に描かれる寿像(または寿容と、没後に描かれる遺像に大別できる。寿像は逆修(生前に行う、自らの死後の冥福を祈る仏事)に用い、遺像は追善の仏事に用いる。寿像は存命中の像主本人に似せて描かれる。遺像の内、没後間もない時期に制作されたものは、近親者や親交のあった人物による発注が多く、故人に似せて描かれるのが一般的であった。一方、故人の面影を知る人がいなくなった後世に、先祖供養や顕彰のために描かれた肖像画では、容貌が美化される傾向がある。この肖像画では容貌の描写に美化がみられないことから、その手本となった原画は、久秀の実際の容貌の特徴を捉えて描かれたと考えられる。そのため、この肖像画は久秀の容貌をうかがい知ることのできる貴重な資料と評価できる。

描かれた容貌から、年齢は四十〜五十代に見える。久秀は六十七歳の時に剃髪し、七十歳で没していることから、亡くなった当時よりも若い時の姿で描かれていることになる。京都五山の禅僧による漢詩等を収録した『翰林五鳳集』には「松永弾正公壽容賛」と題した、相国寺(京都市)第九十世の惟高妙安による久秀寿像の賛が載っており、彼に寿像が存在したことがわかる(5)。これは天文二十年(一五五一)、久秀が四十四歳の時のものである(6)。久秀の周辺では、室町幕府奉行人出身で三好家に仕えた齋藤基速に、永禄三年(一五六〇)に惟高妙安が賛を記した寿像がある(7)。共に寿像かつ惟高妙安の賛ということ、興味深い。

この肖像画の原画と、久秀が四十四歳の時の寿像との関連は不明である。しかし、久秀が没した時よりも若い姿で描かれているという点において、寿像が存在したことに注目したい。没時の容貌のほうが記憶に新しいにもかかわらず、それよりも若い容貌で描かれているということは、寿像を手本とした可能性が考えられる。

## (三) 仕服について

容貌と共にこの肖像画のもう一つの注目点は、久秀の傍らに描かれた仕服である。仕服は茶入れを入れる袋のことで、この肖像画では、桐の文様を金糸であしらった金襴製として表現されている。金彩を施し、布地の皺まで表現した描写は、大紋の文様や腰刀の桐紋の描写と比べて、際立って

入念である。

武家肖像画に、「物」が描き込まれるのは珍しい(8)。久秀は多くの名物茶器を収集したが、中でも「付藻茄子」の茶入と、「平蜘蛛」の釜が有名である。付藻茄子は、元々は足利將軍家の伝来品とされ、永禄元年(一五五八)に久秀が入手した。この時久秀は、寿像の贊者である惟高妙安に依頼して、付藻茄子の伝来を記した「作物記」を作っている。そして茶会の記録である『松屋会記』には、久秀が永禄六年(一五六三)正月十一日に多聞城内で催した茶会の記録に「ツクモ、金欄の袋に入る、袋の緒浅黄」とある(9)。この肖像画の仕服は、緒の色は異なるが金欄であり、桐の文様も足利家將軍家の家紋である桐紋に通じることから、付藻茄子を収めていることを暗示して描かれたと考えられる。

この仕服が描かれたのは、名物茶器の収集家として有名であった久秀を象徴し、ひいては久秀の文化人としての一面を強調したいという意図があったと考えられる。

#### (四) 桐紋について

松永家の家紋は葛紋であったと伝える。それとは別に、永禄四年(一五六一)二月一日に、將軍足利義輝から將軍家の家紋である桐紋の使用を、三好長慶・義興父子と共に許されている。



図12 大紋の文様の比較。

上段は三好長慶像模本(図10に同じ)の左胸部分。下段は松永久秀像(当館蔵)の左胸部分。

この肖像画では、腰刀の柄の目貫に典型的な桐紋が表現されている。一方、大紋の植物文様は葛紋や一般的な桐紋には見えない。そこで、足利將軍や三好一族の肖像画での、大紋と腰刀の目貫における家紋表現をまとめてみた。

#### 【像主】

#### 【衣服の文様】

#### 【目貫の文様】

足利義輝(10)

桐文(家紋でなく文様)

桐紋

三好元長(11)

三階菱に釘抜紋

三階菱紋

三好長慶(12)

桐文(家紋でなく文様)

龍と推定される

三好義興(13)

桐文(同右) + 他の植物文様

桐紋

三好義継(14)

桐紋

不明

三好実休(15)

文様なし

三階菱紋

三好長光(16)

三階菱に釘抜紋

三階菱紋

武家肖像画においては衣服や目貫に表される文様は自家の家紋が一般的であり、桐紋を許された者は桐紋をあしらったとみられる。この肖像画の目貫の桐紋は、足利將軍家から桐紋を許されたことを誇るものでもある。また、桐紋を衣服にあしらう時は、定型化した「家紋」ではなく、意匠の自由度が高い「文様」として表現される例が多くある。改めてこの肖像画の大紋の文様を検討すると、花の表現が桐とみられる箇所があり、異形の桐の文様、または写した際に形が崩れた可能性が考えられるが、断定はできない(図12)。今後、類例を調べ、確定を目指したい。

#### おわりに

この肖像画が制作された経緯の推察をまとめてみる。まず原画が、天正五年の久秀没時からそれほど時間を経っていない時期に描かれたと推定される(17)。その際、生前に描かれた寿像を参考にして、四十〜五十代頃の容貌で描かれた可能性がある。その後、十八世紀後半に、原画を写してこの肖像画が制作されたと推定する。

制作された動機は、子孫等による顕彰や供養のためや、当時の古物研究への関心の高まりによる、古い絵画の調査収集の一環であった等が想定される。修復の際に表木に墨書が確認された麻野惣右衛門が関与したと考えられる。

肖像画は、歴史上の人物のイメージ形成に大きな影響力を及ぼす。これ



図13「弾正忠松永久秀」  
（『芳年武者無類』）当館蔵



図14「松永弾正久秀」  
（『太平記英勇傳』）当館蔵

までの久秀像は、信貴山城で織田信長に追い詰められた久秀が、平蜘蛛の釜を打ち割り、爆死したとする、『川角太閤記』等で広まった江戸時代に創作された逸話に基づいて作られた錦絵ばかりであった(図13、図14)。

その容貌は、悪人面であり、主君の三好氏に仇をなし、將軍足利義輝を暗殺し、東大寺の大仏殿を焼くという戦国の極悪人にふさわしいものであった。現代においても、こうした錦絵がメディアでの歴史特集などで使用され、久秀の悪人イメージの再生産につながっていったといえよう。

近年、久秀は史料に基づいた研究が進んだことで、悪事の逸話が史実ではなく、実際は主君の三好家に忠誠を尽くし、同家の政務や外交に力を発揮したと再評価されている。この肖像画の発見は、松永久秀の再評価を進めていくうえでの資料の一つとしての意義を有するものである。

【註】

- (1) 令和二年三月に、久秀の肖像画の新出資料であり、本人の実像に近い容貌を描いている可能性が高いことがわかったとして報道発表した。
- (2) 中西裕樹「松永久秀の出自と高槻」(『しろあとだより』第5号、高槻市立しろあと歴史館、二〇一〇年)。
- (3) 烏帽子の留め方は、武家肖像画の多くでは、烏帽子内側にある小結を髻に結び被り方で、掛緒は見えない。
- (4) 本稿執筆中に、この久秀像の歯は駢歯の可能性があると指摘を受けた。儒教の祖、孔子の像では、二本の前歯が飛び出た表現があり、これを駢歯と呼び、聖人の象徴とされる。しかし、孔子像の駢歯は歯と歯の間隔が開いているのと、ふくよかな顔立ちであること、駢歯で描かれた武家肖像画の例がないことから、該当しないと判断した。

(5) 『翰林五鳳集』巻五七(『大日本仏教全書』第一四六巻、仏書刊行会、一九一六年)。当該部分は次の通り。

松永弾正公壽容贊

形容面目大依然。圖書猶留後嗣傳。汗馬成功三赤劍。登龍乘變一金鞭。淺斟低唱把羅扇。穩坐端身開綺筵。桃李門中多喜色。芙蓉幕下得兵權。民歌美政歸斯主。士感殊恩服厥賢。威僉知之雖草木。德惟馨物比蘭荃。始終保節心無二。遠近嚮風才有荃。眉壽好將名字祝。喬松永々耐延年。

右松永弾正公壽容。欲余繫贊辭。々々不允。卒賦一百一十二字貫華書其上。式規遠大云。

天亥仲夏吉慶星月

前瑞龍妙安七十二老衲書之

(6) この年の二月、久秀は弟の松永長頼と共に近江国(滋賀県)志賀へ進出して六角定頼と戦い、七月には長頼と共に京都の相国寺で細川晴元方の三好政勝、香西元成らを打ち破っている。

(7) 頂妙寺(京都市)蔵。

(8) 武家肖像画の像主に添えて描かれる「物」では、太刀がしばしば見られる。馬の例もしばしばあり、他に弓術を得意とした人物が弓を、馬術に優れた者が鞭を持つなどの例があるが、武器以外は珍しい。

(9) 神津朝夫「松永久秀と茶の湯」(天野忠幸編『松永久秀——歪められた戦国の鼻雄の実像——』宮帯出版社、二〇一七年)。

(10) 国立歴史民俗博物館蔵。

(11) 見性寺(徳島県藍住町)蔵。

(12) 聚光院本、南宗寺本とも同じ。

(13) 京都大学総合博物館蔵の模本(図11)。原画は、知恩寺(京都市)塔頭・養源院に伝来した三好一族の肖像画群の一つと推定される。

(14) 前掲(13)に同じ。

(15) 前掲(13)に同じ。

(16) 前掲(13)に同じ。

(17) 没後の制作時期がわかる例としては、永禄七年(一五六四)に没した三好長慶の肖像画は、聚光院本が三回忌、南宗寺本が元龜二年(一五七二)に制作された。また、足利義輝像(前掲(10)に同じ)は十三回忌に制作された。

## 帯仕山の城郭遺構について

中西 裕樹

### はじめに

三好長慶の居城として知られる芥川城(芥川山城跡)は、標高一八二・六mの城山(三好山)に立地する(本市大字原)。北・西麓は芥川が洗う峡谷であり、比較的傾斜が緩やかな南麓も城山集落を挟んで芥川が取り巻く。一方で東側の標高約一九〇mの帯仕山方面は地続きとなり、芥川城へのアプローチも容易である(図1)。このため、芥川城のグラウンドプラン(縄張り)は、この方面に堅土塁や堀切が配して守りを固めるものになっている(後掲の図2を参照)。

天文二十二年(一五五三)七月、『細川両家記』等の軍記物によれば、三好長慶が帯仕山に陣を置き、芥川孫十郎が守る芥川城を攻撃した。翌月に孫十郎は降伏し、長慶はこれ以降、芥川城を居城とした。現在、帯仕山には城郭遺構(遺跡名「帯仕山向城跡」)が認められ、この際に構築された陣城に伴う遺構だと考えられている(1)。小文では、あらためて帯仕山の陣城に関連する記録や主な軍事物を確認し(2)、この遺構の概要と評価を述べてみたい。

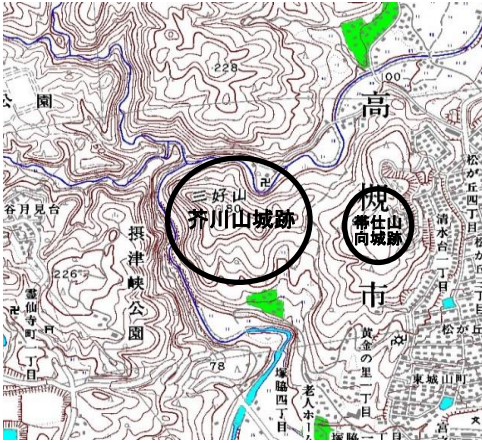


図1 帯仕山周辺の地形図

### ② 『足利季世記』卷五「大樹都落之事」

同年七月三日、三好筑前守長慶芥川城工押寄、城ノ東ノ帯シ山工陣取、対陣シケル、

天文二十二年(一五五三)七月三日から、三好長慶は芥川城を攻めるため、その東に位置する帯仕山に陣を置いた(①・②)。当時、長慶に追われていた旧主細川晴元が京都奪還の動きを示し、三月からは長慶と距離を置くようになった将軍足利義輝が京都の清水寺に隣接する霊山城(京都市東山区)に入城していた。芥川城には、これらの動きに同調した芥川孫十郎が籠城していた。

### ③ 『言継卿記』天文二十二年七月十六日条

十六日、(中略)葉室へ罷向、中御門同道、次松尾社務所へ罷向、留守之間申置、水論之儀無心元之由申、次社務相光朝臣葉室へ来、様体雑談有之、晩食各相伴了、先之中御門内田中隼人佐、此方沢路彦九郎、桂庄之中路美乃守、并郡之中路若狭守所へ中分之事申遣之処、同心之由返答了、然者今日芥川三好方へ罷下、松尾衆申留了、次中路同名備前入道来、各対面勸酒、様体申候了、中御門・予為兩人、芥川鳥養兵部丞方へ書状相調、以飛脚遣之、予調之、文章如此、松尾社家与四ヶ郷用水相論之儀、既可及糾明之由候、隣郷之事候間、以中分落居候様候者可然候歟、両人之申事、雖如何之様候、左右方別而存候子細候間如此候、此由筑前へ被申、可為無事之段專一候、尚小泉山城守・中路若狭守可被申候、謹言、  
七月十六日  
言継  
宜忠

鳥養兵部丞殿

次又社務所へ罷向、書状案文見之、酒有之、次日入之後、中御門令同道帰了、戌初刻計帰宅、路次之万灯会近頃之見物也、

七月十六日付で、京都の公家・山科言継は、芥川城攻めの最中である長慶(筑前)に知らせを届けた(③)。具体的には、長慶の家臣鳥養貞長(兵部丞)に宛てられた書状で、京都の桂川の用水をめぐる四ヶ郷(葉室・河

### 一 記録と軍記物

以下、時系列に沿って、関連記録と主な軍記物の内容を確認していく。

#### ① 『細川両家記』

一、同七月三日より長慶衆、芥川城東の方を帯し山へ陣取給ふ也、是は芥川孫十郎依有謀叛也、此時河原方父子、濱左右亮を人質に被取候也、

島・桂上下・郡)と松尾社が領する山田郷との用水相論(いづれも京都市)が折半で解決したことを言繼と叔父の中御門宜忠が報じたものである。「芥川鳥養兵部丞方」とあり、日付をふまえると、この書状は芥川城攻め陣中に届けられたものと思われる。

#### ④『足利季世記』卷五「大樹都落之事」

同月廿八日、公方義輝公ヨリ細川右京大夫入道一清旧功ステカタク思食、御免許アリテ都エ返シ入ラレケル間、晴元方牢人一千余人、所々ヨリ入洛シテ三好衆宿々エ放火シケル、是ヲ聞テ、三好長慶芥川城ニ押ヘヲ置テ、同年八月朔日、長慶并河内ノ畠山高政・安見美作守ヲ引率、二万余人ニテ責上リケレハ、公方様モ晴元モ中々一戦叶ヒカタク思食、トルモノモトリアヘス都ヲ開カセ給ヒテ近江ノ国ヲ指テ落給フ、

七月二十八日、將軍義輝は細川晴元と和睦し、ついに晴元の軍勢が京都に入つて三好方の宿所を焼いた。これを聞いた長慶は芥川城攻めに押さえるの軍勢を残し、八月一日に河内の畠山高政、安見宗房(美作守)らと京都へ攻め上がり、義輝と晴元を近江に没落させた(④)。

#### ⑤『言繼卿記』天文二十二年八月十九日条

十九日、(中略)今日於葉室書状調之、三好・斎藤越前守・松永弾正・森長門守・大北兵庫助等方へ、山科三ヶ所率分等之儀申遣、沢路筑後守芥川へ差遣了、

#### ⑥『言繼卿記』天文二十二年八月二十二日条

廿二日、(中略)今日午時芥川城渡之云々、河内安見請取之云々、三好人数昨日陣払云々、来廿五日三好可移之由風聞、弥前右京兆難被出張様体也、

#### ⑦『言繼卿記』天文二十二年八月二十三日条

廿三日、(中略)沢路筑後守昨夕上洛とて来、三好以下芥川城之儀に取乱之間、来廿五日以後可来之由有之云々、

八月十九日、山科言繼は、家領の山科三ヶ所(京都市)と所管する率分關等に関し、三好長慶と家臣の斎藤基速(越前守)、松永久秀(弾正)らに宛てた書状を作成し、使者(沢路筑後守)を「芥川」に遣わした(⑤)。これも芥川城攻めの陣中だろう。二十二日に芥川城は開城し、安見方が請け取った。すでに三好方は陣払いしており、二十五日に長慶が芥川城へ移ってくるという(⑥)。それまで長慶は、越水城(兵庫県西宮市)を居城としていた。言繼の使者は二十二日の夕方に帰洛したが、長慶らが「芥川城之儀」で慌たしいので、あらためて二十五日以降に来るようにと伝えられている(⑦)。開城の様子については、次の記録・軍記物からもうかがえる。

#### ⑧『お湯殿の上の日記』天文二十二年八月二十三日条

かうしんかきしん上申さるゝ、昨日つのくにあく田川しろおちて、みよしにかうさんして、しるをみよしにわたすよし、みなく申、

#### ⑨『敵助往年記』下巻

同日、摂州芥河城安見成扱城渡之云々、芥川者人数五百計、坂井之城迄罷退云々、則三好筑前・同松長等城請取也、相住云々、

#### ⑩『細川両家記』

一、同八月廿二日に芥川孫十郎方、兵糧無之して、噯に成て退城也、則城を長慶へ被受取候也、此時の人質衆を被誅也、同廿五日に長慶入城候也、芥川孫十郎方の無念推量申候、阿州へ被下候て三好豊前守方たのみ、堪忍の由に候也、芥孫は三豊の妹簀也、  
一、同廿九日に晴元の御曹子を三好孫次郎方御伴候て、越水より芥川城へ御上候也、

#### ⑪『足利季世記』卷五「芥川落城之事」

同八月十八日、晴元方ノ牢人撰州多田ノ塩川伯耆守ニ一味シテ池田表エ蜂起シ、芥川ノ後巻ヲセント企ケレトモ不叶、散々ニ成行ケレハ、同十九日、芥川孫十郎兵糧ニツマリ、色々三好方エ和親ノ儀侘言アリ、城ヲ明テ渡シケル、長慶衆同日打入、芥川一味ノ人質ヲ皆被誅ケル、芥川ハ三好豊前守カ妹簀ナレハ、其好ミヲ頼ミ、阿州エ下リケル、三



好長慶も則同廿五日、芥川城ニウツリ給へハ、同廿九日ニ子息孫二郎モ聡明丸ヲ御供申、芥川城ニ入奉ル、同九月三日、芥川城ヨリ松永甚助大将ニテ屋上城責給フ、波多野与兵衛モカネテ支度ヤ有ケン、

八月二十三日、宮中で昨日に芥川城が落ち、三好に降参して城を渡したとの噂が流れた(⑧)。その際、城は安見宗房の仲立ちで引き渡され、芥川方五〇〇人ばかりが塚まで退いた。長慶と松永久秀が城を受け取り、「相住」という(⑨)。以降、両名らが城に居住したということなのだろう。

また、二十二日の開城は兵糧が尽きたためであり、長慶は人質を誅して二十五日に入城した。無念の孫十郎は三好実休(豊前守。長慶の弟)を頼って阿波国に下る。これは孫十郎が、実休の妹婿であったためという(⑩)。この他、これ以前の動きとして、八月十八日に晴元に与した摂津国人の塩川国満(伯耆守)が芥川城の軍勢と三好方を挟み撃ち(後巻)にしようとして出陣したが失敗した。そこで、翌十九日に兵糧に窮した孫十郎が長慶に詫言をしたが三好勢は攻撃を加え、人質を殺したという。長慶の入城の後、

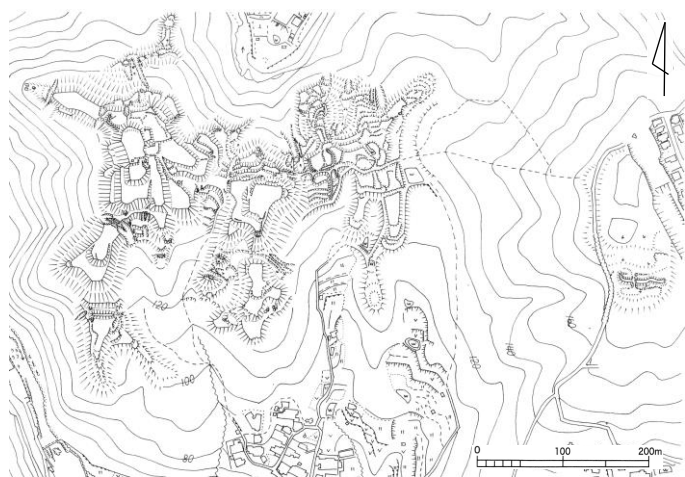


図2 芥川山城跡・帯仕山向城跡 概要図 (中西作図)

二十九日には子の義興(孫二郎)が細川昭元(聡明丸。晴元の子)とともに入城、九月三日には芥川城から松永長頼(甚助。久秀の弟。後の内藤宗勝)が丹波国の波多野元秀が抛る八上城(兵庫県篠山市)攻撃に出陣したという(⑪)。

## 二 遺構の概要

標高約一九〇mの帯仕山のピーク周辺には平坦な地形が広がり、段状の区画が確認される。しかし、付近は過去に開発(開墾)がなされていたようで、形状的に城郭遺構とは断定できない。周辺斜面も自

然地形であるため、図2・3ではこの地形を表現していない。

このピークから緩やかな斜面を南に下った地点に、土塁と堀切が確認できる(以下、図3を参照)。土塁の長さは東西方向に約六〇mであり、南に堀切が並行する。中央やや西寄りに土橋が存在し、両サイドの土塁の高低差が若干異なる。土塁は西端が北側に湾曲し、東側では北に方向を振った後に東へと伸びる。その理由としては地形の影響をあげられるが、形状はピークからの斜面を囲い込むように見え、並行する堀切も同様である。堀切の長さを含め、これらは戦国時代末期の畿内の城郭に特徴的な横堀の機能に近い。なお、ピークの東西斜面は、比較的急斜面となっている。

横堀とは、曲輪の切岸を取り巻く大半が土塁を伴う堀で、明確な削平地を持たない臨時性の強い山城陣城では自然地形を取り巻くことで城域を明確にした。その事例としては、主に永禄元年(一五五八)と同四五年に入京を目指す足利義輝方と三好方との合戦で使用された如意ヶ岳城(京都市左京区)、同六年前後の堂之庭城(京都市北区)があげられる(⑫)。

また、図3では示せなかったが、帯仕山の北東は地形続きとなり、現在水道施設が建つ場所との間が狭い尾根状になる。この場所では、周辺の住宅開発以前に多重の堀切が確認されていた(⑬)。高槻市教育委員会では二〇一七年に芥川山城跡を対象とした航空レーザー測量を実施した。その範囲はおよそ一km四方であり、作成した赤色立体地図(図4)では先述の堀切と土塁の遺構だけでなく、地表面観察では確認が困難であった多重堀切についても痕跡かと思われる微地形が看取された(図4の○部分)(⑭)。



図3 帯仕山向城跡 概要図 (中西作図)

## おわりに

帯仕山の城郭遺構は、自然地形を残すピーク南側の緩斜面を土塁とセツトの堀切で画し、北東の地形続きを多重堀切で遮断する縄張りを示している。後世の開発もあつて詳細は明らかに難しいが、城域は東西約一五〇m、南北約二〇〇m以上の可能性がある。また、土塁の西端が緩斜面を囲い込むような平面形であり、自然地形を囲むという意味において、不完全ではあるが戦国時代末期の横堀を伴う陣城に通じると評価しておきたい。ピークの東西斜面は比較的急傾斜であるため、堀切や土塁などの遮断施設を設けずに斜面、もしくは切岸(人口の急斜面)のみであったのかもしれない。この簡易な構造は、畿内の政庁として恒常的に機能した芥川山城跡の高低差を持つ曲輪を尾根上に連ねる縄張りとは比べると鮮明になる。

また、芥川山城跡は、現時点で関連の一次史料が九一件一四八点、軍記・系図等が三〇件六七点と非常に文献に恵まれた戦国期山城である一方(6)、城攻めに際しては小文で取り上げた天文二十二年(一五五三)七月〜八月に限定される。帯仕山に陣城を築く動機は芥川城攻め以外には想定ができないため、その城郭遺構は当該期のものとして大過ないだろう。

使用時の文献が複数残る京都の如意ヶ岳城や堂之庭城の事例は、畿内の



図4 帯仕山向城跡 赤色立体地形図(部分。註2『芥川城跡』より)

縄張りの年代観を考える上で重要で、さらに帯仕山の城郭遺構はその先駆けとなる。また、研究者が「帯仕山付城」(7)と呼んできたように、機能としては攻城戦における陣地Ⅱ付城に限定され、『言継卿記』の記述からは長慶らが帯仕山に権門の使者を迎えていた可能性を示す。これらの意味において、帯仕山の城郭遺構は城郭史をとらえる上で大変貴重な存在であり、今後の研究の進展を期待したい。

## 【註】

- (1) 拙稿二〇〇〇『摂津国における中世城郭構造把握の試み・土塁の使用形態に着目して』(『中世城郭研究』一四、中世城郭研究会、村田修三二〇〇四「芥川山城・付、帯仕山付城」(『図説 近畿中世城郭事典』、城郭談話会。後に中井均監修・城郭談話会編二〇一四『図解 近畿の城郭Ⅰ』(戎光祥出版所収)、拙稿二〇一五「芥川山城 帯仕山付城 今城塚古墳」(同『図説日本の城郭シリーズ2 大阪府中世城館事典』、戎光祥出版)。
- (2) 出典は中西裕樹・西本幸嗣・川元奈々「芥川城関連連史資料」(中西裕樹・早川圭編二〇二一『高槻市文化財調査報告書第39冊 芥川城跡・総合調査報告書』、高槻市)に拠る。
- (3) 例えば、拙稿一九九九「京都 勝軍山城・如意ヶ岳城の再検討」(『愛城研報告』四、愛知中世城郭研究会)、拙稿二〇一五「堂之庭城」(中井均監修・城郭談話会編『図解 近畿の城郭Ⅱ』、戎光祥出版)など。
- (4) 過去に著者が故本田昇氏からの情報提供を受けていた。本田氏は一九八〇年代以降に本格化する「縄張り研究」のパイオニアであり、帯仕山の縄張図(下図)を作成していたという。氏は二〇〇三年に逝去されており、この図を確認することは叶わなかった。
- (5) 拙稿二〇一八「V・芥川山城跡 航空レーザー測量」(『高槻市文化財調査概要45 嶋上遺跡群42』(高槻市教育委員会)。
- (6) 註2。
- (7) 註1の参考文献名がこれを示している。

発行日 二〇二二年三月三十一日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

大阪府高槻市内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ:高槻市ホームページ「たかつき歴史Web」内で掲載

<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/site/history/4538.html>